

一 次の文章は、山本夏彦が一九七〇年代に書いた「門松」という批評文である。当時の日本では、戦前と異なり、正月を祝わない家庭が増えつつあった。この文章を読んで、後の設問に答えよ。

正月になつても、門松を立てない家が多い。国旗を出さない家が多い。町中かけ回っているタキシーの運転手は、松も旗も年々へるばかりで、もう正月はなくなったようなものです、と言う。

戦後はなぜ松を立てないか、旗を立てないかと以前私は問われて、戦前はなぜ立てたか、当時立てたひとと、いま立てないひととは全く同じ人物だと答えたことがある。

(注一) 貝塚茂樹さんは、正月は門松を立てるがよい、立てないと正月はこない、(注二) 虚礼だというものがあるが、そうではないと十何年前に書いた。同じ主旨の文章を、何度も書いていたから、思いつきの発言ではなく、本気で言っているのだらうと思う。

貝塚説は「告朔の餼羊」を例にひいて論じていた。告朔の餼羊は、むかし(注三) 支那で、毎月朔日(一日)に羊をいけにえにした祝儀だという。

(注四) 実際家の支那人のことだから、あとでその羊は食べたのだらう。それなのにむだだ、形式にすぎない、羊がかわいそうだ、やめましよう、弟子の一人が言ったので、お前は羊を惜しむか、私は「礼」のすたれるほうを惜しむと、孔子さまはおっしゃった。

その故事をひいて、貝塚さんは松を立て、しめ縄をかざり、年頭の挨拶をかわして、はじめて正月がくる。そのけじめをつけなければ、正月はこない。もともと歳月にはけじめがないから、古人がそれをつけたのだと言って、^①俗論に酬^{むか}っていたから、読んで私はにこにこした。

けれども毎年、暮になると、門松と日の丸を印刷した細長い紙が二枚、どこからともなくあらわれて、戸ごとに配給される。欄外に(注五)「新生活運動」と書いてあるから、いまだにそんな運動があつて、その本部がこれを印刷して、無料で全国にくばつて

いるものと知れる。これを門柱に貼^はつて、門松のかわりにして、むだをはぶけというのである。

どういうわけかそれを有難^{ありがた}く頂戴^{ちやうだい}して、門柱に貼^はつて、かくて門松は日本中から姿を消したのである。

貼るのは木材資源を惜しんで、むだをはぶこうためではない。今はむだが奨励^{しょうれい}される時代である。まだ使うに耐える「旧式」を捨て、「新式」を買えとすすめ、ひとがそれに従つて、従わないものをばかにする時代である。

門松なんぞ儉約して、どうなるものでもない。いくらだか知らないが、儉約した金は、ほかのむだづかいに回されるのがおち、である。

松をかざらぬくらいだもの、(注六) 屠蘇^{とそ}を祝わぬ家がふえた。「おせち」をつくらぬという親がふえた。もう十年近く正月をしないと、自慢する親がふえた。年始の客を避けて、スキーに行くことにしたという。

この親たちは、昔の正月を知っている。風^たをあげたことがある。百人一首をとったことがある。自分の年の数だけ、餅^{もち}を食べたことがある。

いかにも、おせち料理はうまいものではない。あれは昔の保存食だそうで、それなら今は意味を失っている。冷蔵庫や冷凍庫があるこんにち、つくらなくていいものである。正月料理も現代式にすべきだと、もつともなことを言つて、洋風、中華風の馳走^{ちそう}をつくる家がある。

それは美々しく、栄養もあるだらうが、必ずしも正月の膳に出なくてもいい料理である。あらわれても、正月を表現しない料理である。

大人にとって正月は、つまらぬものであることが多い。あんなものが、着々と来られては困ると思うことが多い。それは今も昔も同じである。

だからといって正月をしないのは、たとえ合理的であらうと、子供のためにならない。大人は正月を経験して、迷惑して、子に道づれに旅に出るなら、それはそれなりに筋は通っているが、そのおかげで子は正月を経験しなくなる。屠蘇も雑煮^{ぞうに}も経験しなけ

れば、それを経験した、隣家の子と話は微妙に違い違う。

そのくい違いは多くなるばかりで、同時代人が同じ笑いを笑わなくなったのはこのせいではないかと私は思っている。すでに風あげを経験しない男の子がいる。羽根つきを経験しない女の子がいる。

風が民芸品として売られているのを見た。あれはあげるものではなく、壁にかけて眺めるものになったかと大人は笑うが、子供は共に笑う子と、笑わぬ子の二派にすでに分れている。

門松を立てないで、屠蘇を祝わないで、^②百人一首をとらないで（以下略）、日本の子供に共通の正月はこない。^{（注7）}相変りませず、茶の間でテレビを見物しているなら、または勉強を強いられているなら、それはほかの月のほかの日と同じで、去年と今年の間になんの区別もない。

十年二十年たつてそれを回顧すれば、そこには正月さえないのだから、他の年中行事は全くない。ただひたすらのつぺらぽーである。

門松も国旗も、だれも立てない今、立てよと言うには勇気がいる。これしきのことに勇気がいるとは^{（a）}シヨウシだが、いるのである。

貝塚説を読んだとき、私はそれを感じた。門松立てるべしと、ひとが言わぬことを、また言えば古いと冷笑されることを言ったことにすこし驚き、次いでいかにもと感心したが、それにもかかわらず松を立てるものはあるまいと察して、思わず私は笑ったのである。

それを自分が望んだのだから、今の親たちに正月がこなくても、自^A自^Bだと私は思っている。けれども、道づれにされる子供は^③迷惑である。子供たちは反抗すべきである。

子供たちよ、風をあげよ。こまを回せ。ママの手と、進学塾から脱せよ。脱しなければ^{（b）}ボンも正月もこない、いくら言っても、そんなものはこなくていいと、はじめママなるひとが、次いでパパなるひとが言うだろう。

それなら、親たちはその子が大きくなったとき、結婚式もやめるがよい。男女が^{（注8）}赤縄でつながれたら、実際上の婚姻は成ったのである。^④その式を年々盛大にするのは矛盾である。あんなものやめよと言っても、とんでもないと言うことをきかないなら、親たちよ、門松は立ててやるがよいと言え、賛成する読者はないではなからう。

けれども、頭で賛成したひとと、やっぱり松は立てないだろう。脳みそと手足は、関係がなくなったのである。言葉と行為は無縁になったのである。だれもそれを怪しまなくなって久しくなる。

貝塚説も、その^{（注9）}驥尾に付したわが説も、隣人を動かす力はない。門松ばかりのことではない。言論はひとを動かさない。

以前、我々が戸ごとに門松を立てたのは、隣の家が、またその隣の家が立てたからである。町内の全員が立てるのに、ひとり立てないのは、よほどの貧乏人か、よほどのつむじ曲りか、そのどちらかである。今はだれも立てないから、立てるほうが怪しまれる。

我々はあたりをうかがって、大ぜいのすることを見て、それに従う動物である。隣人が立てれば立てるし、立てなければ立てない。

ただそれだけのことである。理屈は何とでもつくからその理屈を借りて、たとえば「日の丸」を、戦前は立てないひととを、戦後は立てるひととを「^C分」にする。言葉はひとを動かさない。かえってひとに従う。

以前立てたひとと、いま立てないひとと別人ではない。全く同一の人物であることを、かねがね私は残念に思っている。それを当人に思い知らせることはできないと知りながら、こうして私は^⑤回らぬ筆をあやつっているのである。

（注1） 貝塚茂樹……昭和時代の中国史学者。

（注2） 虚礼……形式だけの無用な礼式。

（注3） 支那……中国に対してかつて日本人が用いた呼び名。

(注4) 実家……物事を現実に役立つように処理することが上手な人。

(注5) 新生活運動……国民の手によって日常生活を向上させるといふ趣旨の運動で、一九五〇年代に鳩山内閣が提唱した。この運動が全国に広がる中で、行事の簡略化が進んだ。

(注6) 屠蘇……屠蘇散という薬を入れた酒。邪気を払うものとされ、正月に飲まれた。

(注7) 相変りませず……あいかわらず。

(注8) 赤縄でつながれる……「赤縄」とは、夫婦となる運命にある男女の足同士を結びつけていると信じられた目に見えない縄のこと。ここでは、男が夫婦になることが決まることを「赤縄でつながれる」と言っている。

(注9) 驥尾に付す……すぐれた人の行った仕事を参考にすること。

問一 部(a)(b)のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 空欄

A

C

に入る漢字一字をそれぞれ答えなさい。

問三 部①「俗論に酬いていたから、読んで私はにこにこした」とあるが、その説明として最も適当なものを選びなさい。

ア 歳月にけじめをつけるために古人が行事をはじめたという世間で信じられている説を貝塚茂樹は支持していた。筆者は、行事を否定する現代人に矛盾を感じると同時に、行事によってけじめをつける必要も感じていたため、貝塚に共感する部分があった。

イ 正月行事を否定する世間の考え方に対して、行事なくしてけじめなしと言って貝塚茂樹は反論していた。現代人が、消費社会を生きつつ、行事はむだだとすることに反発し、また、正月行事を単なる形式だとも思わない筆者は、貝塚に共感する部分があった。

ウ 歳月にけじめをつけるために古人が行事をはじめたという説は、貝塚茂樹が支持していたとはいえ、根拠のないものであった。正月行事は合理的ではないと考える現代人に、少しでも共感する部分を持っていた筆者は、非合理的な貝塚説を愚かしく感じた。

エ 門松などをむだなものとみなす世間の非合理的な考え方に対して、貝塚茂樹は合理的な反論を試みた。行事はむだと言いながら、むだな消費に励む現代人になじめず、正月行事にみられる中国的な合理性を大事にする筆者は、貝塚の考えを好ましく感じた。

オ 歳月にけじめがつかなくなるのを嫌った古人が行事をはじめたという、世間で信じられている説を貝塚茂樹は支持していた。伝統的な正月料理がすたれることを嫌うとともに、中国的な合理主義を愛する筆者にとって、貝塚のふるまいは好ましいものであった。

問四 — 部②「百人一首」とあるが、「百人一首」の和歌を選定した人物を選びなさい。

ア 菅原道真 イ 正岡子規 ウ 与謝野鉄幹 エ 藤原定家 オ 大伴家持

問五 — 部③「迷惑である」とあるが、どのような「迷惑」がかかるというのか。本文の言葉を用いて分かりやすく説明しなさい。

問六 — 部④「その式を年々盛大にするのは矛盾である」とあるが、なぜそういえるのか。説明として最も適当なものを選びなさい。

ア 本来結婚式は、簡素な形で行われていたから。

イ 正月行事もまた、盛大に行うべきものだから。

ウ 子供たちは、親たちに反抗するはずの存在だから。

エ 正月には、本来門松を立てるべきだから。

オ 他の場面では行事を省こうとしているから。

問七 — 部⑤「回らぬ筆」の「回らぬ」とは「役に立たない」というくらいの意味であるが、なぜ「役に立たない」と言うのか。

説明として最も適当なものを選びなさい。

ア たとえ筆者がすじのおった論を書いて、納得する読者がいたとしても、もはや人間が思考に基づいて行動することがなくなってしまう以上、結局筆者の論が現実世界を動かすことはないから。

イ たとえ筆者の論に賛同してくれる人がいたとしても、筆者の論が時代遅れで合理性に欠くということは否定できず、筆者の論に従って行動する人間があらわれて、世界を動かすことはないから。

ウ たとえ筆者が合理的な意見を言ったとしても、筆者の意見に賛同してくれる人は少なく、大多数の人から反発されてしまい、筆者の意見は、現実を変える力を持たないものとどまるから。

エ たとえ筆者がどんな理屈をつけたとしても、その理屈に反対する理屈はいくらでもつくわけであり、筆者の理屈がどんなにすじのおったものであっても、結局は反論の余地が残ってしまうから。

オ たとえ世間とは異なる筆者の意見に共感して行動する勇気ある人間がいたとしても、そういう勇敢さは多くの日本人にとって好ましいものではなく、勇気ある人間は排除されることになるから。

問八 — 部「当時立てたひとと、いま立てないひととは全く同じ人物だ」とあるが、どういうところが「同じ」だと筆者は考えているのか。本文の内容をふまえて、分かりやすく説明しなさい。

「今日はまためずらしい人に会ったよ。」

近ごろ、父は学校から帰ると、娘にそう言つて、その日会った「めずらしい人」の話をすることが度々重なつた。三日目おきか、五日おきである。

父は私立学校の国語教師で、その学校を定年になってからも、講師としてつとめている。二月前に息子が結婚して別に家を持つたあとは、娘と二人暮らしである。息子はおそい結婚で、三十三であつたが、娘も二十六である。父ははじめの妻には四年で別れて子供がなく、二度目の妻には二人の子供がありながら、娘が六つの時に別れた。その後はひとり身を通した。長くいてくれた家政婦があつて、その人をいっそ主婦に直してはという話も親戚から出たが、息子と娘が受けつけなかつた。そんなことが起きたので、家政婦はいづらくて出て行つた。

父は子供が小さい時から、娘よりも息子を可愛がつて来た。^①息子は女性的だつた。父の身のまわりにも娘よりもよく気をくばるようだった。学生時分からおしゃれで自分の靴といっしょに父の靴をみがき、自分の洋服といっしょに父の洋服にアイロンをかけた。ネクタイから下着まで、父の身につけるものは息子が見立てて買つて来た。息子は料理もした。台所で息子が夕飯の支度をしているのを、父が娘に、お前も手つだつたらどうだと言ふことがあると、

「好きでしているんですから、じゃますると、ごきげんを損じるのよ。」と娘は落ちついたもので、「兄さんを女のようにしてしまつたのは、お父さんのせいじゃないの。」

「あれは小さい時から、母親の真似ばかりするんだ。」

「兄さんはお母さんのいなくなつたことがこたえて、お父さんにたいしてお母さんのようにしようと、心にしみたのかもしれないわ。わたしにはそれがいやらしいわ。」

そして、息子が結婚して別居してからの老父のさびしがりようは、娘には同情よりも^(a)嫌悪の強い時があつた。父がその日のネクタイにも迷つて、三本も四本も結び変えたりしても、娘はだまつてながめていることがあつた。学校から帰る父の姿には、前よりもめつきり疲れが見えた。急にふけた。

「今日はめずらしい人に会つたよ。」

^②父のそれがはじまつたのは、それからであつた。

「^③田舎の小学校で同級だつた女の子なんだ。女の子と言つたつて、今はえらい婆さんだが、年の割に、僕なんかよりは、ずっと若く見えた。気の強い子だったからね。その子で、印象に残っていることが二度ある。むかしの田舎の小学生の僕らは乱暴で、学校の帰り道に、女の子の髪の毛をひっぱりこしたことがあつた。男の子が一人ずつ女の子を倒して、お下げの髪をつかんで引きずるんだが、女の子の早く泣きだした組が負け、長くこらえた組が勝ちで、その子はしまいまで泣かなくて、五六人の男の子の中で、僕が一等になった。女の子が泣きはしないかと、顔を見ながら引きずっていたから、その子がつりあがつた目で、目ばたきもできないでこらえていた、きつい顔は、今でもおぼえているんだ。」

何十年後に、父はその子に東京の町角で会つたのだという。その子は保険会社の重役の妻で、もちろん孫もあるそうだ。父は向うから声をかけられたのだそうだ。

そのつぎに父が出会つた「めずらしい人」は、^④父の高等学校時分の質屋の小僧であつた。父は学校の寮に入っていたが、そのころの寮は自由なもので、父は休暇で帰省する時に、寝るふとんを質入れして、広島県に帰る道、京都かどこかに途中下車して一日見物するのだつた。寮にもどる時は学資をもらつて来るから、質受けすることができた。

「寮にそのふとんを、かつぎに来てくれたり、またかついで来てくれたりした、小僧なんだよ。今は芝で、やはり質屋の店を持っているそうだ。なつかしがつてね。」

また、父ははじめの結婚の^(b)仲人夫妻に道で出会つたと、学校から帰つて娘に話した。その妻は再婚したが、苦勞ばかりして、

十年も前に死んだそうである。

「短いあいだでも、夫婦として暮した女が死んだのに、^⑤こつちはなんにも知らないんだからね。」と父は言った。

それから父は、むかし縁があつて、今は遠ざかっている人に、次ぎ次ぎと町で偶然に会おうらしい。そのたびに娘は聞かせられた。大学の友だちだとか、教師になつてはじめて教えた学生だとか、むかしの家主の娘だとか、娘の母の親友だとか、むかしの尺八の相弟子だとか、むかしの山登り仲間の姉だとか、田舎の村の人だとか……。しかしその人たちに会ったという父の話は、だんだん簡単になった。^⑥娘は疑わしいと思うようになった。

「今日はまためずらしい人に会ったよ。」

例によつて父がそう言つて、洋服を脱ぐ前に、ポケットからたばこやハンカチを出した。ただ、むかしの友だちに会ったとだけで、その友だちの説明はなかった。娘がハンカチを拾いあげると、そのなかから大きく赤いもみじの葉が一枚こぼれ落ちた。

「まあ、きれい。料理のお皿にそえてあつたんですか。そのお友だちと夕飯にいらしたの。」と娘は言った。

「いや。風でね、学校の^⑦もみじの葉が散つていてね。この葉が僕の頭に散つて来たんだ。一枚だけね、僕の頭に落ちた葉なんだ。」

父がほんとうにこう度々「めずらしい人」に出会うのか、娘はたしかめてみたくなつた。父の退け時^{ひきとき}はわかっているのに、娘は学校の近くの駅^{ものかげ}の物蔭にかくれて待った。父は急ぎ足で駅へ来た。右手で軽く合図した。父が会った女を見て、娘は胸を突かれた。^⑧それは娘の母であつた。娘は立ちすくんだ。

これまで、父が会つたと話した「めずらしい人」は、みんな父の嘘で、じつは母であつたのかと娘は思った。父はなぜ娘にかくすのか。再婚して、今の夫も子どももある母のためか。いつから、どうして、父は母に会うことになつたのか。

この次ぎは、自分も母に会うつもりで、娘は三日駅へ通つた。母は来なかった。四日目、父は駅へはいつて来る中年のきれいな婦人を見て、立ちどまると首をかしげていたが、近づいて話しかけた。婦人はげんな顔をした。思い出せぬという風である。父

は何か人ちがいをしているらしい。娘は父に走り寄りたくなつた。^⑨父が会つた「めずらしい人」も、みな人ちがいでなかったのかとおそろしくなると、娘の母のあの女も人ちがいという疑いがわいた。

(川端康成「めずらしい人」)

問一 部(a)(b)の漢字をひらがなに直しなさい。

問二 部①「息子は女性的だった」とあるが、それに対する娘の心情について説明したものとして最も適当なものを選びなさい。

ア 純粋に父のためを思つて、母の代わりをつとめているのだと兄自身は考えているが、娘は、父親への孝行などではなく、兄が妹をのけものにするためにそうしているにすぎないと思つており、不快感さえ抱いている。

イ 幼い頃に母親と別れて以来、かいがいしく父親の世話をするようになった兄へと、父親の愛情が注がれる中、本来自分がつくべき母親の代理という立場を兄に奪われたことについて、娘はいやらしいと感じている。

ウ 娘は、別れた母の代わりであるかのように兄が父に尽くす様子を嫌い、また、兄が女性的になった原因は父にもあると思われるのに、父がそのことを深く考えていないように見えることも、好ましく感じていない。

エ 幼い頃に母親と別れ、人間形成の過程において母親の愛情を欠くことになつた兄は、その苦しみを解決する方法として母親のように振る舞っていると娘は感じており、そんな兄のことを気の毒に思っている。

オ 母親と別れ、ひとり身で苦勞している父親のために、母親のように振る舞う兄の気持ちに娘は共感しており、父親が「母親の真似ばかりするんだ」と言つて、兄のその気持ちを理解しないことを不快に思っている。

問三 — 部②～⑦の説明として適当なものを三つ選びなさい。

ア — 部②「父のそれがはじまったのは、それからであった」について。これは、父が「めずらしい人に会った」といい始めたのは、子どものときから娘より可愛がっていた息子が家を出て、娘も父に冷たい態度をとる中、父に疲れが見えて以来だという意味である。このとき娘はまだ、父の話に疑問を抱いていなかった。

イ — 部③「田舎の小学校で同級だった女の子なんだ」について。「小学校で同級だった女の子」の話には、女性に対して尊大な態度をとってしまうという父の欠点、幼少時代に始まるものであることがほのめかされている。このような父の欠点こそが、娘の父に対する嫌悪感の原因だということに父は気づいていない。

ウ — 部④「父の高等学校時分の質屋の小僧であった」について。小学校で同級だった女の子や、高等学校時分の質屋の小僧など、自分より力や立場が弱かったものについての記憶が鮮明なのに対し、自分と対等な関係にあった人物や、最初の妻の記憶があいまいであるなど、父の過去の記憶にはむらがあった。

エ — 部⑤「こっちはなんにも知らないだからね」について。それまでの父親は、出会った人物との過去を、今でも自分の中に息づいているかのように、生き生きと娘に語り聞かせていたが、ここでの父親は、過去の人物が、知らぬ間に自分の手の届かない存在になってしまった悲しみを、寂しげに娘に語り聞かせている。

オ — 部⑥「娘は疑わしいと思うようになった」について。父親の「めずらしい人」の話が始まったときには、特に疑問を抱かず、耳を傾けていた娘も、偶然が重なる上、父の話が具体性を失っていく中、父に対する長年の不信感も手伝って「めずらしい人」に会ったという話自体が嘘ではないかと疑うようになっていく。

カ — 部⑦「もみじの葉」について。「もみじの葉」よりも前の部分では、「めずらしい人」に会うのは、老いて父の精神が衰えたためだと、娘はまだ考えていないが、「もみじの葉」の描写において、父の未来には老いと衰えしかなことが暗示され、娘が父の老衰を疑う最後の場面が準備されている。また「もみじの葉」が一枚なのは、父の現在の孤独と重なる。

問題は次のページに続きます。

問四 — 部⑧「それは娘の母であった」とあるが、この部分の前後の内容について解釈したものとして最も適当なものを選びなさい。

ア 娘は、「めずらしい人」の話には真実味がないと感じ始めていたが、父が母に会っているとは考えもしなかったので、母を目撃した瞬間は驚いてしまい、ついで、混乱におちいった。その後、無関係な他人を母だと思いこんで話しかけている、老いてすっかり衰えてしまった父の姿を目撃した娘は、恐怖をおぼえた。最終的に娘は、娘自身が父の衰えの要因であることを、自覚できたと考えられる。

イ 娘は、父が母と会っているとは思いつかなかったで、父が母に会っているのを見て意外に感じる部分もあった。また、母を深く愛している娘は、母に会えた喜びを感じつつも、さまざまな疑問の中で混乱した。その後、娘は、人ちがいをする衰えた父の様子を目撃し、恐怖をおぼえた。最終的に娘は、娘自身が父の衰えの要因であることを、自覚した可能性があるが、本文にそのことは明確に書かれていない。

ウ 娘は、「めずらしい人」の話は嘘だと思い始めていたが、父が母に会っていることは想定外であったため、母を見たときは驚き、ついで、わけのわからないことが多くて混乱した。その後、母を見ても母だと分からぬほど衰えた父の様子を見た娘は、父の死が近いことを理解し、恐怖した。最終的に娘は、娘自身が父の衰えの要因であることを自覚した可能性もあるが、本文にそのことは明確に書かれていない。

エ 父が母と会っているという想定外の事実にあふれて、娘は最初驚いたが、やがて、愛する母への思いがあふれ、その場から動けなくなった。その後、娘は、父が母のことを母だと分からないほどに衰えていることを知り、恐怖を感じる。この恐怖には、かけがえのない存在との再会を果たしながら、そのことをもはや喜べない父の様子を通して感じる、人間の老いに対する恐怖も含まれている。

オ 娘は、「めずらしい人」の話を疑わしく感じ始めていたものの、父が母に会っているとは予想していなかったため、最初母を見たときは驚きを感じ、ついで、様々な疑問が生じてきて混乱した。その後、娘は、人ちがいをしているらしい父の様子を目撃し、恐怖をおぼえる。最終的に娘は、父の人ちがいの原因が娘自身にもあるのではないかと感じた可能性もあるが、本文にそのことは明示されていない。

問五 — 部⑨「父が会った『めずらしい人』も、みな人ちがいでなかったのかとおそろしくなると」とあるが、仮にみな人ちがいだったとしたとき、父がたびたび「めずらしい人」に出会ったと思ひ込むようになったのはなぜだと考えられるか。本文で描かれている親子関係をも視野に入れて、具体的に説明しなさい。

問六 作者の川端康成に関する次の問いに答えなさい。

(1) 川端康成以外でノーベル文学賞を受賞した日本人をひとり選びなさい。

ア 太宰治 イ 大江健三郎 ウ 村上春樹 エ 宮沢賢治 オ 灰谷健次郎

(2) 川端康成の作品をひとつ選びなさい。

ア 人間失格 イ 兎の眼 ウ 古都 エ 海辺のカフカ オ 金閣寺

解答は、いいねいに書くこと。
記述は解答欄内に収めること。一行の欄に
二行以上書いた場合は無効とする。
※欄には記入しないこと。

受験番号			
氏名			
※			

一

問一
a
b

問二
A
B
C

問三

問四

※

問五

問六

問七

問八

※

二

問一
a
b

問二

問三

※

問四

問五

※

問六
(1)
(2)